

## 2 共通英語教育

神戸女学院はアメリカ人宣教師によって創立されたミッションスクールである。そのため伝統的に英語教育には力を入れており、本学の教育の特色の一つとなっている。現在、本学独自の取り組みとして行なわれている共通英語教育についてその経緯と特徴を見ていきたい。

### (1) 経 緯

現在行なわれている共通英語教育は2001年度にスタートした共通英語教育が基になっている。全学部1、2年生が履修するという形で始まり、2011年度から2年生の Workshop が英語化された。その前年度2010年11月25日、共通英語教育改革を目指すワーキンググループが発足した。英文学科所属ではない英語教育専門外の先生が学生の英語レベルを目の当たりにして、共通英語教育について考えたことがきっかけであった。神戸女学院で英語を教えるにあたって何が重要なのか、どのような教育をしたいのかを話し合った。まず第一に考えたのが「語学力を高める英語教育」から脱却して「共感性を高める英語教育」にシフトするということだった。つまり、英語力をどのような場面で使えるようになるかが重要であり、いろんな分野で活躍できるような力を学生に身に付けさせるということである。これは本学のミッション・ポリシーに合致し、伝統の再構築につながる。ではそのためにどうすればいいのか。①英語レベル別の到達目標をしっかりと明確化して教える。②プロジェクト型の教育を推進する。③専門英語との連携を強化する。つまり、諸外国の人々に学生自らが成し遂げたこと、自分の考え、自分の思いを伝えて、相手の成し遂げたこと、相手の考えや思いをしっかりと聞いて、お互いに共感できるような力をつけること、これが共通英語の到達目標となる。

ちょうどこの議論をしている最中の6月末、文部科学省の外国語能力の向上に関する検討会から「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」が出された。これは小、中学校に対する提言ではあったが、今議論

していることと合致するという事で、方向性が間違っていないことが確認できた。本学と同様、この検討会のメンバーも英語教育の専門家ではない人が多かったという。

学生の英語教育については他大学でも同じ問題に直面している。課題は学力低下、学力多様化への対応のための管理体制の構築となる。本学の場合、いわゆる伝統的な英語教育を担っていたのは宣教師の先生方であった。その中で Bogard 先生 の教育目標が注目に値する。先生は他に先駆けてオーラル・アプローチという手法を導入した。①間の取り方やイントネーションなど英語の基本的なことを教える。②反復練習させる。③実用的な英語教育で終わらないで communicate する contents が重要である、と言っている。提言は英語教育の専門家が発想したことではないので、これからの英語教育の詳細を固める上での詳細設計をする前の仕様書として考えてもらいたいという思いで作成された。

この提言を基に、神戸女学院リベラルアーツ教育の根幹であるきめ細かな教育を行なうために様々な検討が繰り返された。内容としては①語学レベルに合わせて到達目標、教育目標を考えて別個に教育を行なうこと。②学校の専門性や特質と合致した英語教育であること。③語学力だけでなく、中身で話をする、専門教育と接続できるようなコンテンツを用いること。④授業以外のフィールドワーク科目の可能性も考えられること、が挙げられた。そして課題として採点基準、ガイドラインの問題も話し合われた。

こうした仕様書に沿った形で具体的なカリキュラムを作って運営する組織が必要であるということで、2013年4月共通英語教育研究センターが発足した。センターが発足するまで全学の英語教育は共通英語教育委員会が全学科の調整を取りながら英文学科が担っていたが、発足後は英文学科以外の4学科(IMPB)の英語教育はすべて同センターが責任を持って行なうことになった。それに伴ない、センターと各学科の英語教育についての連携を図るために「共通英語連絡協議会」が作られ、年4回会合を開くこととした。これらの話し合いの中でカリキュラムが具体化され、2014年4月から共通英語新カリキュラムが実施された。

## (2) 共通英語教育の位置づけ

英語教育には2つの考え方がある。ESP (English for Specific Purposes) と EGP (English for General Purposes) である。リベラルアーツ・カレッジでの ESP は困難とわれてきたため、これまで本学の全学科共通英語は EGP による4技能 (Reading, Writing, Listening, Speaking) を高める英語教育で、教材は学生の専門性には配慮していなかった。しかし新しいカリキュラムを始めるにあたり、敢えて全学的に ESP を取り入れ、全国に先駆けて英文学科以外の全学科で行なうことにした。共通英語教育は3年生以降の各学科での英語教育と連携した形で学生の英語力の底上げを図るものである。入学時高い英語力を持つ学生には特別コースが、1年生終了時に TOEIC600点に相当する英語力を身に付けた学生には通訳・翻訳プログラムが用意されるなど、学生のレベルに応じて多彩な英語教育プログラムが選択できる。自らの専門科目を学びながら高い英語力を身に付けることができるよう設定されている。1年生から自分の専門分野に対する興味を深め、英語学習のモチベーションを高められる。

## (3) 新カリキュラムの概要

①1年生の共通英語の授業時間数を2倍に増やし週4コマとした。これに伴ない卒業必要単位を4単位増やした。②オリジナルテキストを使うことで神戸女学院の歴史、学生生活、卒業生の活躍等を英語で学ぶ。Communication in English の教材プリントもセンターで編集し、どのクラスも同じ内容の授業を受ける。③授業の進め方、学生の評価方法を統一、非常勤講師との連携を深める。④入学時に TOEIC750点相当以上で、欧米大学への正規留学を目指す学生対象に特別コース English Honors Program を設ける。

## (4) 共通英語教育の内容

### ①共通英語科目について

1年生の Communication クラスは入学時の IP-TOEIC スコアに基いたレベル別クラスになっており、native speaker が担当する。Reading and Writing は週2回、後期には ESP の考えを取り入れて各学科の専門に関連した入門書を英語で理解することを目標とする。また、TOEIC スコアアップを目指した

授業も展開する。2 年生前期ではテーマ別の授業において学生が興味を持つ分野(テーマ)を英語で学ぶ。後期には前期の内容を深化させ、専門分野に関連するテキストを学ぶ。3 年生以降の授業に役立つよう各学科の基本的な概念、専門用語などを英語で学ぶ。

## ②授業について

授業では共通英語教育研究センターが独自に編集した神戸女学院大学を様々な角度から捉えたオリジナルテキストを使用することによって大学に関する知識を高めながら、読解力、文法力、作文力、語彙力を高めることを第一の目的としているが、学生一人一人が本文の英文を応用して自分自身、大学について英語で語る練習ができるので、グローバルな場で必須の自己アピール力の基礎を身に付けることもできる。またテキストの随所にキャンパスの写真を掲載することで「学舎が教育する」というヴォーリズの理念をさらに効果的にする役割も果たすことができ、学生の大学におけるアイデンティティの確立にも寄与し得る。「英語教育を通してアイデンティティ確立に寄与することもできる」という新しい独自の英語教育法」と言える。これは一つの自校史教育と位置づけられる。English Workshop の授業だけは能力別ではなく、30あるテーマの中から興味あるものを選んで受講することができる。担当者も内容を深めて教えることができる。

授業外のサポートとして、独自に開発した英語学習用記録手帳を全学生に配布し、表彰制度を設け学習意欲を高める工夫をしている。英語を気軽に使ってもらうため English Café の時間を設定したり、TOEIC 等の受験対策のための補習授業も行なっている。

## (5) 2020年3月末時点での総括

新カリキュラム実施からこれまで ESP 教育と英語資格・検定試験指導を重要な2本柱に据え、リベラルアーツ教育の理解を深めることと学生の将来に必要な性の高い TOEIC 指導に主に力を注いできた。そしてそれを支えるための Oral Communication 教育を3本目の柱とした。リベラルアーツ教育への理解をすぐに確認することは難しいが、IP-TOEIC スコアの平均点と伸びは全国で

も例を見ない大きな伸びが出ているので、一定の成果をあげているといえる。

## 参考資料

『神戸女学院百年史 各論』（神戸女学院、1981年）

『2011年度秋季大学教授会研修会報告—本学の共通英語教育をいかに変えてゆくか—』（神戸女学院大学、2011年10月12日）

『神戸女学院大学共通英語教育研究センター活動報告書』 Vol.1 (神戸女学院大学共通英語教育研究センター、2015年 3 月31日)、同 Vol.2 (2020年 1 月13日)

(佐伯裕加恵)

共通英語教育研究センター・スタッフ (2013–2022年度)

年度	センター長	メンバー	事務
2013	寺嶋正明(教授)	川越栄子(教授) Kuris A. McDonald(准教授)	豊福裕子(課長補佐)
2014	寺嶋正明(教授)	川越栄子(教授) Kuris A. McDonald(准教授) Kevin Ballou(専任講師) Margaret Kim(専任講師) 田岡千明(専任講師)	豊福裕子(課長補佐)
2015	川越栄子(教授)	Kuris A. McDonald(准教授) Kevin Ballou(専任講師) Margaret Kim(専任講師) 下村冬彦(専任講師) 田岡千明(専任講師)	豊福裕子(課長補佐)
2016	川越栄子(教授)	Kuris A. McDonald(准教授) Kevin Ballou(専任講師) Margaret Kim(専任講師) 下村冬彦(専任講師) 田岡千明(専任講師)	豊福裕子(課長補佐)
2017	川越栄子(教授)	Kuris A. McDonald(准教授) Kevin Ballou(専任講師) Margaret Kim(専任講師) 下村冬彦(専任講師) 田岡千明(専任講師)	豊福裕子(課長補佐)
2018	川越栄子(教授)	Kuris A. McDonald(准教授) 田岡千明(専任講師)	豊福裕子(課長補佐)
2019	川越栄子(教授)	Kuris A. McDonald(准教授) 田岡千明(専任講師)	専任なし
2020	寺嶋正明(教授)	Kuris A. McDonald(准教授) 田岡千明(専任講師)	専任なし
2021	寺嶋正明(教授)	Kuris A. McDonald(教授) 田岡千明(専任講師)	専任なし
2022	白井由美子(教授)	Kuris A. McDonald(教授) 田岡千明(専任講師)	専任なし